

「走馬引しは、しかし、注家の間で解釈がわかるので、検討が必要だ。説明の都合上、まず鈴木注を引く。

○古桑府の題である。引は曲のごとし。むかし橋里牧茶というものが父のため仇討をして人を殺し山の中にかくれていたところ、夜、天馬がおりてきて鳴きたてた、牧茶は役人の追手がきたのかとおもい逃げ奔ったが、夜があけて見れば天馬の足あとがあった、そこで彼はこれに自分の居た処が危険なので天馬が逃げろと教えてくれたのか、といって沂沢という処へ入りこんで此名の琴曲を作ったのだといわれる。長吉の作は牧茶の事とは全く関係がない。ただ襄陽走馬客という句があつて、それが走馬引という題をつかつた理由だと考へる。

「題意」 襄陽の走馬の客というものを借りて自己の感想をのべた詩。

○玉銚 劍の切先の白く光つて玉の様なるをいう。○載雲 浮雲を決する意。○襄陽 一に長安に作ると、長安ならばこれは全く自己を言うたものである。襄陽とあつてもそれは自己を比したのである。或は初め長安としたのを余り露骨であるから襄陽に換えてホカシたものかも知れぬ。襄陽は湖北省にある地名で、ここは六朝時代には兵力の中心地であり、勇武の士が集まった、襄陽客といえば武にたけた人を意味する。○嫌淨 淨は清らか、それを嫌うは血で汚さんとおもうこと。○嫌冷 冷は「ひややか」、それを嫌うは血で熱したいとおも

うこと。○向人 他人に向つてつきつける。○照身 我がからだを照らしかがやかす、これは  
單に飾り物とすることを用いる。末の二句、旧注多く曖昧にして要を失す、予は愚見による。  
此詩、恐らく長安へ受験に出る時の作だろう。

わたしには故郷にいとまをつげる時にたすえた剣がある、その剣の白玉の様な鋒先は天  
の浮雲をもきることができる。わたしの意気は襄陽に馬を走らせる武勇の士のその如く、  
春の様な揚揚たるものがある。朝となく暮れとなく、剣の花は血でよごれること、剣の光は  
血で熱することをわがっている。わたしはこの剣で相手に向つてそれを殺すことは心得てい  
るが、それをひからせて、だてに我身の飾りものにするには心得ておらぬ。

鈴木注が文字の異同に觸れているので、ここで校記をまとめておく。

底本の北宋本では、この詩をのせる葉が後代の補写だから、ここに引いたものは宋蜀本による。  
題の「走馬引」を全唐詩の樂府の部では「一」に天馬引という」と注する。第二句「載」を王注は  
「吳本では裁とする」という。第三句「襄陽」を樂府詩集などの注に「一」に長安に作る」という。  
「客」を唐文粹などは「使」とする。第五句の「光」を元刊本等は「花」とし、「淨」を樂府詩  
集などは「靜」とする。第六句の「光」を全刊本などは「花」とする。第八句を樂府詩集などの  
注は「一」に解持照身影に作る」という。

鈴木注が「曖昧にして要を失す」という旧注は、末二句について、どういふ風に解くか、真正

子の注にいう。

末句は一に解持照身影に作る。襲うらくは是ならん。けだし、牧旅よく剣を持して人に向い、又よく馬声を聞いて自ら悟り、身を全うして去る、を言う、故に、持して身を照すを解す、というなり。

吳正子は詩中の「我」「裏陽の客」を牧旅とみ、末二句は「剣で仇を殺すこともできるが、剣をかみとして、ちゃんと身を守ることもできるのだ」というほどの意とするのである。

曾益の注は面白い指摘があるので、このころもあわせて引く。

莊子の説劍に云う「上 浮雲を決す」と。梁の武帝の詩に云う「竜門 紫金の戟、翠旆 白玉の霧、照燿す 雙闕の下、知る是れ裏陽の兎なるを」と。李白は云う「胡霜 劍花を払う」と。家語に云う「子路 剣を抜いて舞う。子曰く、君子は忠して質となし、仁して衛となす。何ぞ剣を持せんや」と。人を殺して山中に匿る、故に剣を緝縛という。玉鋒とは白きをいう。截雲とは利きをいう。剣、白く且つ利なり。故に走馬の客、山中に匿るといへども、意氣、春を生ずるなり。朝暮は淬劬して人に向うをいう。照身は、既によくこれを持って以て人を殺し怨に報けるも、これを持って自ら蔽うを解せざるをいうか。必ず能くするをいうなり。

末二句についての解釈は、ほぼ鈴木注と同じことをいつているのではないだろうか。重愚策の注にいう。

ただ剣を嫌うを知って、自ら嫌うを知らず。襄陽の客を説る。

これだけではわかりにくい。董注の前に徐濟の注があつて「剣の冷淨を嫌うとは即ち蒯緱の意」といふ。蒯緱とは千ガヤのなわをまいた剣の柄のこと。「史記」孟嘗君伝に、馮驩が孟嘗君の客となつたが冷遇をいきどおつて、千ガヤの縄をまいた柄をたたきながら、柄さんよ、帰ろうかい。膳に魚もつかぬじゃないか、と歌つた話がつてゐる。董注が徐注を前提としてゐるのなら、冷遇をいきどおることには知つても、自今の身の程は知らぬ、といつてゐるのだろうか。あるいは、孟嘗君を「襄陽の客」とし、身なりによつて人を冷遇するが、おれの剣はおていさいではなく人を刺す剣だ、とうたつてゐると解するのだろうか。

姚文毅の注にいう。

元和十年、盜、武元衡を殺し、裴度を撃ち首を傷つく。恒州の張昇など八人あり、行止無状。神策將軍王士則は王承宗が晏らを遣わしてなすところと告げ、跣服してこれを斬る。賀正蓋し客の大義に明らかならざるを惜しむ。徒らに叛逆を信じ、妄りに朝首を刺す。卒に首を大桁に懸くるに至る。昧々として軀を損つるも何の益あらんや。ふたつの嫌の字は、客の事あるをもつて樂しみとし、朝に淨く暮に冷たければ、これに對して鬱々たるなくんばあらざるを状す。ああ、牧翁は父の爲に仇に報ゆ。天馬の夜降るあり、これをして逃れて沂沢に入らしむ。ついに琴をとつてこの引を作る。その剣術いまだかつて武相を殺せし者と等しからずんばあらざるなり。しかるに武相を殺せし者は則ち禍をまぬかれず。あに持向するところの

正不正あるにあらずや。持照身の三字、凡そ客たるもの、まさに自ら審かにすべし。後、李師道の平げらるるや、その旧案をえたり。武相を殺せし人王元士等十六人を賞するあり。始めて師道の遣わせしところなるを知るなり。

暗殺の目的と対象をあやま、たことに対する諷刺と見るようである。

王琦の注にいう。

宝剣なるものは君子が身を衛る器、やむをえずして後これを用う。されど、豪侠の子、専ら怒に報い人を殺すをも、て事となす。その閑置して用うるところなきに當、ては、朝暮にその技を一試するを得ざるを嫌恨し、剣鋒をして冷淨ならしむるを深く惜しむべしとなす。殊に知らず、剣を持して人に向うは、正に己が身を照顧して鬚膚身体をこれ受傷せしめざるゆえんなり。もしただよく剣を持して人に向いてこれを殺し、これを持しても、て自身を照顧するを解せざれば、誤まれり。語意深切、特に襄陽走馬の客のため一鍼を痛下す。これはほとんど暗殺そのものを否定しているようである。

三

「武雲」について曾注は「莊子」の説剣を典故として挙げた。次のような話である。むかし趙の文王は剣を好んだ。剣士三千余人がその門に養われ、日夜御前で撃剣し、年間百余

人が死んだが、王はいとわめ。三年たち、國は衰え、諸侯はこのすきにつけ入ろうとする。太子が心配して、王の心をひろがえしてくれろ者には千金を出そうという。莊子を推薦するものがあり、いったん断つたが、やがてひきうけ、儒服をめぎ、剣士の姿で王にまみえる。王は門下の剣士から五六人を送り抜き、莊子と合せようとして、聞く「そなたは長剣をとるか、短剣をとるか」莊子「どちらでも結構です。だがわたしは三種の剣をもっている。王の御意のままその一つをとりましょう。がまず、説明いたしましょう」王「聞かせてもらおう」莊子「天子の剣、諸侯の剣、燕人の剣がこれです」王「天子の剣とは」莊子「天子の剣は、燕國の大谿谷の石城を鋒とし、各國の泰山を銜とし、晉魏二國を脊とし、周末二國を鏑とし、魏魏二國を夾とし、四夷の包、四時の裏、渤海の繞、常山の帯をつけ、五行をもって制撫し、刑徳をもって使用の可否を論判し、陰陽を以て抜き、春夏を以て持え、秋冬を以て一撃する。この剣は正眼にかまえて前に立ちふさがるものなく、挙げて上なく、さげて下なく、まわせば侍に立つものなし。上は浮雲を切り、下は大地をきる。この剣を一たび使用すれば、諸侯を匡正し、天下は帰服する。これぞ天子の剣です」文王は茫然として自失し「諸侯の剣は」莊子「諸侯の剣は勇氣の何であるかを知る士を鋒とし、清涼の士をやいばとし、賢良の士をみねとし、忠聖の士をつばとし、豪傑の士をつかどします。この剣にあたるとに前なく、あげて上なく、さげて下なく、まわして侍らなせず。上は天にの、とり、日月星辰にしたがい、下は地にの、と、て、四時にしたがい、国内の民意をやわらげ、もって四方を安定させる。この剣を一たび使用すれば、雷霆の震うがごとく、天下こ

とごとく審服し、君命に聽従しないものはなくなりす。これが諸侯の劍です。王「燕人の劍は」  
 莊子「燕人の劍は、髪ふりみだし、冠おどろに、野ばかま、目をいからせ、ののしり、進んで相  
 うち、上げ首をはね、下は肺肝をきる。これが燕人の劍、騶雞と同じこと。いったん命たえたら、  
 國事に用なしです。いま大王は天子の位にいて燕人の劍がおすきです。わたしは内心、大王にも  
 似合わせごとだと思つています。」王は殿上に莊子を請じた。……かくて文王は宮中を出ず、三カ  
 月のちには、劍士はみな自殺した。

李賀の「截雲」がこの話にもとづくのならば、その玉鋒は「天子の劍」でなければならぬ。天  
 子は天下の主であろう。それならば天下は天子の郷里であり、天子の劍にとつてもその故郷は天  
 下であろう。天下を故郷とするものが郷を辞するとは、天下を拒否するにほかならぬ。

天下を拒否する劍をもつ我とは誰か。詩が「我」というとき、その「我」を作者の自称ととる  
 のは自然だ。ことに事實に即することを主眼としてきた中国の伝統詩にあつては。しかしまたそ  
 の伝統詩にあつても、数多くの詩を丹念によんでゆくと、詩中の「我」はかならずしも作者の自  
 称ではなく、祭符体の詩のばあいは、ほとんど虚構であることがわかるであろう。「走馬引」は  
 祭符である。その中の「我」は作者李賀に結びつける必要はない。そこに作者の李賀がおのれの  
 心情を託しているにしても。

ではこの「我」はたれか。「袴里牧恭」とみてよいであろう。鈴木注は、賀の作が牧恭の事と  
 は「全く關係がない」といふ註。斎藤注もこれを踏襲する。だが、詩中の「我」を直接作者に結びつけ

る留備になすんだ判断である。

栲里牧恭については、鈴木注が「古今注」によって説明し、それ以上のことはわからないが、李頌が名の類似から聯想を結合したり拡大したりするあの方法を応用すれば「栲里牧恭」の性格をある程度推測できる。

『史記』に栲里子と甘茂の列伝がある。

栲里子、名は疾、秦の恵王の異母弟で、母は韓の女である。疾は滑稽多智だ、たので秦人は皆責へ知恵ぶくろ」とよんだ。かれが渭南（陝西省渭南県）陰郷の栲里に家居したので栲里子とよぶ。恵王が死に太子武王が立つと、栲里子は右丞相、甘茂は左丞相となった。秦は甘茂に韓を攻めさせ、耳陽を抜き、栲里子は車百乘をひきいて周に入った。武王が死に昭王が立つと栲里子の勢威はいよいよ高く盛んであった。

秦が甘茂に韓を攻めさせた、というのは、秦本紀によれば次のような事情であった。

八武王の三年、武王は韓の襄王と会盟し、栲里疾が韓の宰相になった。武王が甘茂にいった、わしは兵車をひいて伊水、洛水、黄河を通り、周の王室を窺いたい。それができれば死んでし恨みはない。周の王室を窺いたい、とは、自ら天子になりたい、ということである。このことばにつづいて、次のようにいう。八その秋、甘茂らに宜陽を伐たせた。四年に宜陽を抜き、首を斬ること六万、黄河をわたって武遂（韓の邑）に築城した。……武王は力があり、力くらべを好んだ。大力の任部、烏獲、孟説らは、みなとりたてられて高官になった。王と孟説と鼎の上げくら



べをし、すねの骨を折、て、八月に死んだ。V このすねの骨を折るの原語は「絶臆」で、賀は「公莫舞歌」2102(20746)に「絶臆刳腸臣不諭」と使っている。

甘茂が韓をうち、宜陽をおとしたとき、栲里子は、秦の駐韓宰相であった。秦の韓をうつことは栲里子に知らされていなかったであろう。栲里子はいのいい人質であった。このときの栲里子の立場は、菅建徳の捕虜となっていたときの李神通と似ていなくはないへ拙稿「李神通」下。秦の武王の野心は、魏の曹操に似、力士を好むところけ「莊子」に描かれる趙の文王にそっくりである。

さて、栲里牧恭が栲里子とかかわりがあるのかわからないのかわからぬが、牧恭は、栲里に住んだから栲里牧恭といわれるのであろう。牧恭というのし、牧童の恭ということかもしれず、恭もまた、名ではなく平生うやうやしい人柄であったので恭という終名がついたのだと考えられなくはない。牧恭が父のため仇討して人を殺した、といえは、牧恭の父は人に殺されたのであろう。子をうやうやしく育てた父は、孝徳ある大官で、その父が殺されたのち、殺した人はめくめくと高位に富み榮え、牧恭は楚の賢宰相孫叔敖の子のように零落し、牧童となつて、薪を負つたのではないかへ拙稿「負薪」

天子が「天子の剣」をふるう世ならば、人を殺した人間がめくめくと生きておれるはずはない。それならば殺された人の子がおのれの手で剣を握らせて仇を討つ必要もない。牧恭が父のために仇を討たなければならなかったのは、天子が「天子の剣」をふるわず、諸侯もまた「諸侯の剣」

をふるわず、庶人の剣、力士の力をふるっていたからではないか。

天子にかえりみられなくなった「天子の剣」はどうなるか。天子にかえりみられなくなった庶人のところにゆくほかはない。

牧恭は栲里の人である。「莊子」逍遙遊にいう人恵子が莊子にいう、わたしのところに大樹があり、人は樗といっている。その幹はこぶだらけで墨繩を引けず、枝は曲ってぶんまわしにするかね尺にしるあてようなし。道はたに立てても、大工は見むきしせぬ。無用の悪木が樗である。人の顔りみめ無用の悪処に自ら居を選んで住む牧恭は、権勢や富貴を求めろ人でないことは明らかである。父の仇がのうのうと目の前でさばっていなければ、無名のまま牛馬を牧して一生を終えたであろう。牧恭が父のため仇を殺したのは、天子のなすべきことを天子がせぬゆえに庶人の牧恭が天子のなすべきわざを代行したことになる。すなわちその行爲において牧恭は「天子」だといわねばならぬ。「天子」のもつ剣が「天子の剣」であってふしぎはない。「天子」は、しかし、天子が天子のなすべきことを行わぬ世にあっては、「非理無法の人」として天子の役人の追跡をうけなければならぬ。天の使役である天馬が、天子にくみせずには牧恭にくみしたのは、天子が眞の「天子」でなく、牧恭こそ「天子」であることを証明するものでなくて何であろう。「天子」でないものが天子を僭称し「庶人の剣」を天子の剣と偽称して侵略し、凌辱し、暴虐しつつあるとき「天子」は法外の者たらざるを得ず、「天子の剣」もまた庶人の剣を偽装して、天子を僭称する者とその一味の血をすするほかはないであろう。

長安が、天子が「庶人の剣」をふるう場所となれば、襄陽は庶人が「天子の剣」を温存する場所とならざるをえない。天子が僭称者にすぎないことを見きわめたとき、「天子」は、天子の法の外の者とされても懼れる理由はない。天子の威勢がにせしのならば、法外者の意気、おのずから春を生ぜざるを得ぬではないか。

不浄が浄と僭称されるとき、「天子の剣」が浄を嫌うのは当然であり、冷酷な政治が仁慈と偽称されるとき、仁慈の心臓をつらぬいて、冷えきった「天子の剣」をあたためてやろうするのは法外の「天子」のやむにやまれぬ感情であろう。

剣は、それをとって人に向うためにある。身を照すためには鏡を手にとればよい。

四

平和のための武器とは、それ自身、矛盾である。莊子のいったのは寓言である。李賀のは鬼詩である。

武器をもつ以上は徹底的に戦うがいい。正義か不義かは徹底的に論争するがよい。それが「天子」だ。理論の不徹底を武器でよろい。よろいの神を理論の衣でかくす。世の天子どしどし「庶人の剣」をふりまわす世の中では、青白い病詩人も「天子の剣」をたたいて暗殺者とならざるを得ぬではないか。非理が理を僭称するとき、理は非理をよそおって狂乱せざるを得ぬではないか。

中島子玉 (二)

1972. 5. 22 - 5. 17

五

前稿を書きおいたのち、『大分県史料』(23)・第八部・先賢資料(昭和三十六年三月三十日、大分県史料刊行会編集兼発行)に中島子玉の『愛琴堂全集』を収めることを知った。子玉が師事した広瀬淡窓の著作は『淡窓全集』へ上巻、大正十四年十二月二十日、中巻、大正十五年十一月十日、下巻、昭和二年一月三十日、大分県日田郡教育会編集兼発行)にまとめられ、このなかに子玉に関する記事が豊富であることもわかった。子玉と交遊したもののうちに白谷仁科はくたに礼宗れいそうのいたことに気づき白谷にくわしい弟の原田禹雄うむむに聞いたら『白谷詩文抄』(天保乙未孟春、醉古堂蔵版)と、白谷が友人の詩を編んだ『十九友詩』の子玉の部分のコピーを、早速おくってくれた。頼山陽はじめ子玉と交渉のあった人たちの詩文も、ぼつぼつ見ることができそうである。興ものってきて年譜をつくりはじめた。ところが、そのころから身辺に事が多くなり、ほとんど三ヶ月子玉と親しむことができなかった。もっとも、事の多いのは今にはじまったことではない。親しみたいことに親しむためにかうては割き得た寝食を、いまわたしの体力は割きえなくなつたといふだけのことなのである。それならば、準備をととのえて一気に書き上げることが断念して

目にふれ耳にしたことから書きとめてゆくほかはない。このようなことを古人は、道曉途説とい  
 って卑しんだ。わたしは古いにしへをしたう者ではあるが古人ではない。古をしたうといつても古のすべ  
 てをしたうのではもとよりない。わたしのみるところでは「論語」のなかにもかなりの道曉途説  
 がまじり、孔子をかつぐ学者もけつして道曉途説をまめかれぬ。わたしはおのれの道曉途説に衣  
 裳を与えて飾らぬように気をつけたいと思うだけだ。

六

前記の先賢資料へ以下「先賢資料」というのの解題に編者中野幡能氏は次のように記す。

中島子玉は名を大貴、又の字を如玉、米華、又海棠寮主人、古香外史と号していた。幼名  
 を盛太郎といい、後増太と改めた。豊後佐伯藩の武士中島幹右衛門季親の長子として、享和  
 元年（一八〇一）佐伯城下の鉄砲町に生れた。幼こ児こより学を好みその才鋒は早くから現れて  
 いた。文化十三年（一八一六）三月、十六才の時藩費により、同郷の古田豪作と共に日田に  
 赴き、広瀬淡窓の門に入った。淡窓に師事すること二年文化十五年正月（一八一七）、子玉は佐伯に帰  
 った。淡窓の懐旧楼筆記卷十八、文化十五年正月十日の条に、

「益多去ル年、春ヲ以テ入門シ、此ニ至ツテ未ダ二年ニ滿タズ、然ルニ学業昇進、誠ニ目

ヲ驚カズニ堪エタリ、去年末都講トナリ、塾政ヲ幹理シテ又其宜シキヲ得タリ、余人ヲ教ヘシヨリ以来、人オ此人ヲ以テ第一トス

と記している。佐伯に約半歳を送り、六月再び咸宜園に学んだ。この年の十一月頼山陽西遊して日田に淡窓を訪ねた。淡窓は子玉を待らし、詩文を示したが、山陽愕然として驚き、至る所で子玉を語ったという。

文政二年（一八一七）七月、子玉は日田から筑前龜井塾に学び、翌三年二月日田に帰り、園の都講となった。全四年六月肥後に遊び、十月長崎より日田に帰り、十一月佐伯に帰った。文政五年江戸昌平校に入り、林祭酒及び松平冠山等の礼遇をうけた。日本新樂府、美人十二詠はその頃の作で部下に誦せられ名声を博したという。その頃多くの逸話を残し、昌平校の齋長に任ぜられた。文政十一年藩に帰る。三月藩主毛利高翰は子玉を藩学の教授に任じ、中小性の格に列せしめた。その年の十二月、肥筑、宗根に遊び、龜井昭陽、古賀穀堂、頼山陽、猪飼敬所、藤崎小竹などと交りを深くした。天保五年三月十五日、破傷風にかかり歿した。年三十四才である。（大分県偉人伝、二豊人文志）。その子に一子兼太郎があつたが、三歳にして死んだ。ために日出藩三ノ丸家老長沢多助が後をつぎ、固一郎、宗一、宗二郎と子孫が続いている。

子玉の著書中最も著名なものは愛琴堂全集七卷、日本新樂府、米善遺稿各一卷、雜著で未稿のものが数十篇ある。本書には雜著以外を全部収録する予定であつたが途中原稿を焼失し

し、遺憾ながら残部しか収める事ができなかつた。返す返すも残念である。本書に収めた愛琴堂全集は元来八冊本であつたが、巻七には天保十三年弟子の高妻友の與書がある。それによつて当時保存が悪かつたので、慨歎してこれを製本し、「失一本今見存者七本」とあるので既に一本を紛失している。中島家蔵本の巻七は「美人十二詠」、巻八は「歌音佳本卷之三」を参考「談伏上・下」、巻四・六・七が「理窟瑣記」である。本書に収められたのは巻四までであり巻五・六・七を焼失の爲収め得なかつた。海常齋吟稿より丹犬樂は佐藤義詮氏蔵本である。

引用の淡窓の文中「増多」というのは子玉の通稱の増太のことで、淡窓は太、多の両字を混用するが、多の字を用いる方がおおい。「二豊人文志」は前稿でわたしが「二豊文人志」とかいた本のことらしく、あるいはわたしの記憶のほうがあやまっているかもしれない。凡例に次の記事がみえる。

- 一、本書は途中原稿を焼失しその爲思わざる多くの障害をうけた。その恢復に種々努力したが、遂に中島子玉の遺稿「愛琴堂全集」のうち海常齋吟稿・談伏及び理窟瑣記の一部を収め得たのみで以下は止むなく収め得なかつた。
- 一、資料の所蔵者については次の如くなつてゐる。